



Artist Clip

中里隆
Takashi Nakazato

土と火と己の手に 素直に、自由に

photo: Yasukuni Iida text: Yurie Kimura



「テランジツ壺」(径 27.5 × 高さ 23.8cm)

傘

寿を記念した80の壺は、国内外17の窯で制作された。およそ2年の間に、唐津の隆太窯はもちろん、20年以上前から冬と夏に通うコロラドを含むアメリカ国内、さらにブラジル、エストニアにも旅をした。

「そこには良い土があるんですか、とよく聞かれますが、土はあまり関係ないですね。いい友達が出て、いい酒がある。ハッハッハ」中里隆さんは豪快に笑う。「80

の器ではあまりに手軽すぎて申し訳ないから壺にした」という言葉には、自ら設定したハードルをクリアできた満足感も窺える。

「最後に作る『口』は器を特徴づける難しいところ。でも現代の壺にははっきりした用途がないから機能を考える必要はない。それで最初に口を作り、それをひっくり返して土の紐を輪積みにし、最後に高台を作ったものが多いですね。普通とは違う作り方だから、

高台も小さくできたんです」

江戸時代に渡来し、唐津藩の御用陶工として重用された中里家の十二代太郎右衛門の五男。焼き物で食べていくと決めたのは25歳で、「結婚がきっかけ」と笑う。スタートの遅さを挽回すべく精進を重ね、蹴り轆轤で1日700枚もの器を作ったことも。名残で右足は半サイズ大きい。30歳の時に1年かけて世界各地の焼き物に触れ、帰国後は種子島での3年を

経て、隆太窯を開いた。

「料理によって器を変えるのも、その器を持ち、口をつけるのも日本特有。食卓を仮想しながら日常使いの器を作っていました」

器はおおらかで繊細で温かい印象。「一番の楽しみ？ 食べて、寝て、あとは仕事。ハッハッハ」仙人を思わせる飄々とした佇まい。年齢にもキャリアにもとらわれず、まだまだ新しい焼き物を求めて突き進む軽やかさを感じた。

最初に口を作り、ひっくり返して土の紐を輪積みにし、最後に高台を作った



「錆朱叩き壺」(径 40.3 × 高さ 42.0cm)

なかざと・たかし 陶芸家。1937年、佐賀県唐津に、中里無庵（十二代中里太郎右衛門）の五男として生まれる。日本国内のみならず、世界各国で精力的に活動中。個展多数。長男・中里太亀、次女・中里花子はいずれも陶芸家。

Information

高島屋美術部創設110年記念
傘寿記念 中里隆 八十壺展

日本橋店 6階美術画廊
11月15日(水) → 21日(火)
※最終日は午後4時閉場